

---

# Fate/guilty gear

戯言遣い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / g u i l t y   g e a r

### 【Nコード】

N 5 1 1 8 Y

### 【作者名】

戲言遣い

### 【あらすじ】

正義の味方は死んだ。しかし世界の意思か人の願いか、彼はのちの時代で聖戦と呼ばれるようになる人と、人ならざるもののとの戦いが起こっている世界で目を覚ました。彼は剣を取る。人々の笑顔を守るために・・・

## 1・未来相克

I am bone of my sword . 体は剣で出来ている。

じいさんから借り受けたその思いは、一つの剣となった。

Steel is my body , and fire is my blood 血潮は鉄で、心は硝子。

脆く、されど曲らない。曲げられない思い。

I have created over a thousand blades . 幾たびの戦場を越えて不敗。

俺は全てを救おうとした。しかし救えなかった時もあった。

Unknown to Death . ただ一度の敗走もなく、

何時しか妥協し始めた。

Not known to Life . ただ一度の理解もされない。

それでも諦めなかった。

Have withstood pain to create  
many weapons . 彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に  
酔う。

救えた人の笑顔を忘れなかった。 それだけで十分だった。

Yet , those hands will never hold  
anything . 故に、生涯に意味はなく。

その笑顔が唯一、俺の救いとなった。

So as I pray , unlimited blade  
works . その体は、一本の剣で出来ていた。

それだけが、俺を駆り立てた。

俺が立つ場所は

いつか見た景色であり

その赤に染まった剣の丘は

エミヤの終着点

そう、終わる。

「やはり君か・・・遠坂」

俺は静かに振り返る。

そこにはかつての魔術の師である、遠坂凜が立っていた。

「ええ、久しぶりね・・・士朗」

「ああ、久しぶり」

なぜここに遠坂がいるか、なんて馬鹿げたことは問わない。

「俺を、殺しにきたのか・・・」

「ええ、そうよ」

かつては師で、今は敵・・・いや、狩人か

「進み具合はどうだ。少しは、近づいたか？」

それでも俺は微笑みながら、そう問いかける。

「そうね・・・それなりに上手くいつてるわ」

遠坂も微笑み、答えた。

「士朗、あなたはどうかなの？」

「そうだな・・・救えなかった時もあったし、救えたときもあった。」

遠坂の問いに、少し考えて答えた。

「そう・・・」

「でも、あいつとは違う。」

俺はエミヤとは違う。

救えなかった命を嘆くより、救えた命に喜びがあったから

「俺は、救えたよ。」

故に、迷いはなかった。

契約も結ぶことなく、俺は終える。

「よかった・・・」と凜は肩を降ろし、そしてゆっくりと俺に近づく。

そして・・・

「ん・・・」

俺の唇を・・・そして手にもったアゾット剣で心臓を刺し、俺の命を奪う。

「愛してる・・・士朗」

「俺もだ・・・り・・・ん・・・」

意識が霞みがかってくる・・・

しかし、恐怖はない。  
穏かな気持ちで「これでいいのだと・・・」そう思い、静かに眼を閉じた。

体の感覚が戻ってくる。

何がおこっているのかと眼をあげると、そこはあの剣の丘だった。  
ただし、俺が殺される時にいた丘ではない。

乾いた風が吹き、空は赤に染まった雲に覆われ、見覚えのある巨大な歯車が回り、大地には聖剣や魔剣といった様々な剣がまるで墓標のように刺さっている。

そうここは・・・無限の剣製

エミヤの世界

裏切りと哀しみに彩られた、あいつの選んだ寂しい俯瞰風景

「ほう、誰かと思えば。遂に死んだか。衛宮士朗」

「アーチャー・・・」



褐色の肌に白い髪、俺と瓜二つ・・・いや、まるで鏡の向こうの自分のような存在  
エミヤンロウ  
別の未来の俺が立っていた。

最後に見たときと変わらず、自信に満ちた笑みを浮かべていた。

「だが、どうやら違うようだ。」

「ああ、違う。お前とは違う。」

そして「クッ」とエミヤは己を嘲笑し、俺は「フンッ」と鼻で笑った。

「結局私とお前の違いは、見たものの違いという事か。」

「そうだ、お前は死者を見て、俺は生者を見た。とても簡単な答えだ。」

「ああ、私はその簡単な答えに気付かなかった愚か者という訳だ。」

あいつはそう言つと、背を向けた。

「もう会う事もないだろう。お前は英雄ではなく、ただの衛宮士朗

として死んだのだから」

「ではな」と、彼は去った。

そして世界は罅割れ、姿を変える。

大地は変わらず赤に染まり、様々な剣が刺さっている。

しかし空は青く、雲は白く、水気を含んだ湿った風が吹く。

無限の剣製  
これが俺の俯瞰風景

人々の笑みを糧とした、たった一つの全て。

やがてその世界も罅割れ、崩れ、そして闇に沈んだ。

気が付くと俺は、荒野の真ん中に立っていた。

「・・・なんでね」

## 1・未来相克（後書き）

大体3～5話で終わらせるつもり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5118y/>

---

Fate/guilty gear

2011年11月17日20時54分発行